

聖霊降臨後第一主日礼拝

「荒野の誘惑」

ルカ4：1-13

(1)

主イエスが、荒野において四十日・四十夜、悪魔から誘惑を受けられたのは、「バプテスマのヨハネ」から洗礼を受けた直後のことでした。

「誘惑」と「試練」とは紙一重の差といえます。受け取りかた次第で、誘惑ともなり、試練ともなります。一つ一つの場面において注意深くあらねばなりません。

モーセの書は、別名「ころみの書」ともいわれてきました。神の民イスラエルが、神の御言に従順であるか否かがあらゆる点で試みられました。ユダヤ教の教師・「ラビ」の見解によれば、わたしたち人間は、さまざまを試みを経て神の栄光を拝するに至ると言います。ただ、注意すべきは、試みの全てが神から来たと言ってはならないことです。

「だれでも誘惑に会う場合、『この誘惑は、神からきたものだ』と言ってはならない。神は悪の誘惑に陥るようなたたではない、また自ら進んで人を誘惑することもなさらない」(ヤコブ1：13)とあります。人が誘惑に陥る大半の原因は、「人が欲に引かれ、誘われるからである」と指摘されています。

「信仰の父」とまで崇められたアブラハムも、飛びぬけて立派な王と称されてきたダビデの生涯も例外ではありません。

宗教改革者M・ルターは、「試みと誘惑」に関する印象深い言葉を残しています。

「自分の頭の上を飛んでいるカラスを追いかつことは誰にもできません。しかし、自分の頭の上にカラスの巣を作らせたとしたら、それは自分の責任です」

御言を信じ、神に従順でありたいと願う時、その歩みは決して平坦ではありません。迷うことが多く、しばしばつまずきます。しかし、例え、倒れても、つまずいても、倒れつぱなしになるといつかはあります。「七転び八起」ではありませんが、聖霊の御力により、いつしか復元する力が与えられています。

詩編には、「わたしは苦しまない前は迷いました。……しかし、苦しみに会ったことは、わたしには、良いことでした。わたしは、これによって、神のおきてを学ぶことができました」(詩編119：71)。

いつなとき、どんなころみに会うかは、誰も予測はできません。まさかあの人が……と思われる人が、とんでもないスキャンダラスな事件を起こして、周囲を驚かすことがあります。

わたしたちが誘惑に勝てないのは、古代ギリシャの神話の中の主人公「ユリシーズ」が、「サイレン」の誘惑に勝てなかった例を挙げるまでもありません。それで、主イエスは、「われらを試みに会わせず、悪より救い出し給え」の一節を「主の祈り」に加えておられます。

牧会者として肌身で感じてきたことは、教

会はキリストの「からだ」といわれますが、からだです。からだは病んでいきます。気づかないうちに、「まひか」と思うことが「からだ」に忍び込んでいきます。次第にからだ全体が病み始めます。思わず、「わたしたちを試みに会わせず、悪より救い出してください」と幾度となく必死で祈りされてきました。とすれば、試みに勝利された秘訣をイエス・キリストから、学ぶ必要があります。

(2)

ところで、主イエスは、「バプテスマのヨハネ」から洗礼を受けられた直後、「聖霊に導かれ、荒野野において、40日間、悪魔の試みに会われました」とあります。

洗礼を受けた直後に、試みられたとは思議な感じがします。

「こんなわたしに洗礼を受けるなんて、とても、とても無理です」としり込みされる方がいます。中には、「もう少しましな人間になってから、洗礼を受けたいと思います」とまじめにいわれる方もあります。しかし、もう少し自分で納得できる人間になれたらというもの、おそろしく一生かかって、なれるものかどうかは分かるものではありません。むしろ、このままでは駄目だ、もっと、ましな人間になりたいと願うなら、不十分なまま、不完全なまま、洗礼の恵みに与るのが一番やさしいのではないのでしょうか。

ところで、主イエスが、悪魔からこうみられた最初の誘惑は、「もし、お前が神の子な

ら」というものです。「もし、おまえが救い主であるなら」ということでしよう。そうした疑いをいなく人の考えを代表しているともいえます。

「そこで、悪魔はイエスに言った。『あなたが神の子なら、この右に、パンになれと言いつけなさい。』イエスは答えられた。『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある」。

わたしたちの神に対する信頼を、土台から揺るがすものは、必ずしも、形而上の高尚な問題ではありません。稀には三位一体が分からないという悩まれる方とお目にかかることがあります。たいして障害とはなりません。

むしろ、「パン」という日常生活のありふれた形而下の問題こそが神への信頼を土台から揺るがすこととなります。確かに、人は生きる糧である「パン」なしには生きることができません。

わたしが大学の学びを終えた時、意を決して、父親に「卒業後、神戸の神学校に行かせて下さい」と願い出しました。すると、最初に口をついで出てきた言葉は、「それでお前はメシを食っていけるのか」という厳しい言葉が返ってきました。「神学校の勉強は、さぞ大変であろう、身体は大丈夫か」などという、いたわりの言葉ではありません。わたしの返答はといえば、「なんとかかりますから・・・」と答えるのが精一杯でした。

太平洋戦争末期には、多くの学徒が動員されました。その学生たちが戦地で体験したことを書き残した手記をまとめたのが、「きけわだつみの声」です。

なかには、中国の奥地を、毎日200キロの重装備を背負い、行軍を強いられた若い兵士が手帳に書き残した手記があります。腹がペコペコであったのか、小さな手帳に、「コーヒーや、果物や、お菓子の絵をノートいっぱい描いています。そのノートを見ていると、彼らの思いがヒツヒツと伝わってきます。

「パン」の問題は、こうして、わたしたちの生存本能を刺激する一番の問題となります。

思想転向を迫るとき、刑事の用いる非常手段と言われていますのは、腹ペコにして、カツ丼とかウナギ丼の美味そうな匂いをかがせながら、自由を迫るといいます。鼻孔をくすくすられ、胃袋が刺激されると、もうそれに抗える（あらがえる）人はいないといいます。だが外れたかのように、つい、ポロット白するそうです。それを「魔の時間」といわれてきました。

「長子の権利」と「家督の権利」との二つの受け継ぐべき大切な霊的な遺産を、熱もの一杯で、弟ヤコブから、だまし奪い取られた「エサウ」の愚かさを笑うわけにはいきませぬ。

「お金がない」時ほど惨めなことはありません。わたしの最初に赴任した教会は、15人足らずの小さな貧しい教会でした。今でも

忘れもしません。二人で一つのみかんを半分にして食べましたといえば、嘘みたいな話です。新聞を講読できないほどでした。「アルバイト」という思いが頭をよぎりました。「福音でメシを、糧をいただきましょう」、「教会からいただく謝儀だけで生活させていただきましょう」とは、その時のわたしの妻の言葉です。それで、一度もアルバイトをしないで済みました。

人は、極度の貧しさの中で、神への信頼を失います。しかし、有り余る豊かさ中でも、人は神を見失うのです。

「ほどよきものをもってわたしを養ってください」との箴言の御言がありますが、ほどよきものさじ加減が分かりません。

「パンの問題」は、年若い伝道者の二人にとって、まさに、試練でも、誘惑でもありません。そうした「何を食べようか」というパンの問題に対して、主イエスは、「空の鳥を見よ。野の花を見よ、必要は添えて与えられる」と申されました。「それでお前はメシを食っているのか」と言われた時、養いたもうお方がおられると気づいて、そのお方に全てを委ねられたことは、まことに幸いでした。こうしたリアルな場面で、レッスンを受けていないれば、講壇から、「何を食べようか、何を飲むか」と、自分の命のことでも思わすうらうらういけません。空の鳥を見よ・人はパンだけで生きるものではありません。神の口から出る一つ一つのことばによる」と、確信をもつ

て語ることができません。

現在日本人においては、飢えることが問題とはなりません。それで、「いちいち祈らなくても、何とかやっていける」と錯覚するかも知れません。始末の悪いことは、祈らなくてもなんとかなるといふ安易な考えが、最も効き目のある誘惑となり、麻酔薬のような効果を産み出します。

(3)

2番目の誘惑は、5節から8節です。

「悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の頂きに立たせて、こう言った。『あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。神は御使いたちに命じてあなたを守らせるとも、あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らの手で、あなたをささえる、とも書かしてあるからだよ。』」

やっかいなこと、聖書の言葉を使いながら、悪魔は巧みに誘惑を仕掛けてきました。

しかし、この悪魔の誘惑に対して、主イエスは、申命記の御言、『あなたの神である主を試みてはならない』との御言で対抗しました。

「悪魔は光りの天使に偽装する」との御言があります。「オレオレ詐欺」程度の偽装すらも見抜けないわたしだとすれば、悪魔の偽装・擬態を見抜くことなどできるものではないかもしれません。

「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい」と言う悪魔の誘惑に、主イエスは応じません。奇蹟のための奇蹟をなさいませぬ。

あやしげな新興宗教の教祖のような振る舞いはいたしません。

主イエスは、「飛び降りろ」といわれて、飛び降りるお方ではありません。あくまでも、一人の人間に止まる、一人の人間に踏みとまると、しかも、ただ、神の御言によって武装しようとしています。

主イエスが「奇蹟」をなさる時には、一つのはっきりとした目的がありました。「人の子は地上で罪をゆるす権威をもつていますが、あなたがたに分るために」と申されて中風の男をいやされた奇蹟をなさいました。(マルク2:10)。(今、このことには、これ以上触れません)。(例外として、「神をこころみ」といわれているのは、マラキ書3章10節です)。「わたしの宮に食物のあるように」、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふれる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる」といわれている箇所です。

第3の誘惑は、9節から11節です。

「今度は、悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」「イエスは言われた。『引き下がれ、サタン。あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』』と書いてある。」

悪魔はイエスを連れて行き、世界の国々を見

せて、この国々のいっさいの権力と栄光をあなたにさしあげます。その全てはわたしに任されているので、わたしがこれと思う人に差し上げることが出来ます。ですから、もしあなたがわたしを拝むなら、すべてをあなたのものといたしましゅう、こうした悪魔の誘惑に対して、主イエスは、「退け！サタン！『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい』と書いてある」と反論しました。こうしたことは、ネブカドネザル大王の時代、「タニエル」たちが経験したことです。

「あなたたちの神を礼拝することは自由です。ただし、金の像だけは拝まなくてはなりません」。その時、タニエルたち三人は、「たとえなにかからざるも」「タニエル3：18」とひれ伏すことを否定し、自らの信仰に立ちました。初代教会のキリスト者たちもまた、ローマ政府から、「カエサル皇帝に頭をさげよ」と命じられました。

キリシタン禁制であった江戸時代、「絵を踏むだけでよい」と迫られました。天皇制国家の戦時下において、「神社は宗教ではない。国民のなすべき儀礼であるから、神社を拝礼せよ」と強要されました。

「国々のいっさいの権力と栄光を、あなたに与える」といふ誘惑は、わたしたちには無縁であるかもしれませぬ。

しかし、自分が地のチリに過ぎない人間であることを忘れて、神のようになろうと大それた考えを抱いたのは、あのアダム夫妻であり

ます。一人の人間として、あくまで止まらねばなりません。それ以上の者でもなく、それ以下の者でもありません。

最後に、主イエスが三度の誘惑に完全に勝利したのは、秘密兵器を用いたものではありません。通常の手段、申命記の御言で勝利されました。これなら、わたしたちにも出来ると思いませんか。神の口から出る「御言のみ」で生きる、「神のみ」がわたしを支えてくださる、「神のみ」に仕えます―この確信に立たねばなりません。

「悪魔の策略に対抗して立ち回るために、神の武器で身を固めなさい。・・・また、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい」(エペソ6：2・17)。

新聖歌102

【祈ります】

父なる神さま、誘惑に勝つことのできる秘訣を学びました。今週も信仰の導き手なるイエスを仰ぎみつつ歩むものとさせてください。主イエスのお名前によって祈ります。「アーメン」